特　集

# 教育方法（コンピュータの活用を含む）をどう教えるか？

井　田　浩　之

## １．はじめに

教育方法（コンピュータの活用を含む）をどう教えるか？　学生たちは，新学習指導要領で掲げられた資質能力を理解し，教育方法と結び付ける必要があるのである。

教育方法の観点から厄介なのは，それらを支える理論体系がどうにも見えてこないのである－現場経験者の実践知に基づくのか，研究者の専門や好みに依拠したものなのか。そうなると，学生たちも結果として知識を享受するだけになってしまうのである。

これだけでも教職課程を担当することがいかに悩ましいものなのかがわかる。刻々と変化する教育政策を見つつ，夥しく提案される視点や実践報告も絶えず睨みつつ，本授業を考えていく必要があるのである。新学習指導要領が告示され，これまでの教育のパラダイムが激変する状況も伝えなければならない。本稿では，現場の直面している緊張感とダイナミズムを可能な限り報告することにしたい。

## ２．学生が持つ教育のモデル

まず城西大学の学生の教職課程履修者の特徴に触れたい。一言で言えば，教職履修者のモチベーションが高いのである。塾講師をして経験を積んだり，教職課程センターを利用したり，意欲的に自己研鑽に取り組む学生が多い。

こういう学生を対象に，何を教えればいいのかを考えたときに，次の３点を実現する機会の提供だという結論に至った。つまり，学生たちが，①どういう授業を作りたいのかを言語化し，②大学生のうちに何を資質能力として身につけるかを見通すことができて，③理論と実践が融合する瞬間を立ち止まって考えることができる，ようになることである。

この背景には，先に述べた学生の状況の裏側にある危機感みたいなものを感じているからである。たしかに学生たちは，常に前進することには熱心だが，自分の判断や思考を更新する機会がなく，結果として，先入観に固辞し続けていることがあるのだ。リフレクションが足りないとも言える。この状況を打破し，不易と流行を判断する力が決定的に欠落しているのだ。

その解決策として，授業の最初に理想の教師像を考え，自分の考えを外化するところからスタートしている。その際，『よい教師をすべての教室へ』（ダーリング－ハーモンド著）で示された新任教師の力量形成のモデルを参照に，それぞれの学生が，残された大学生活で，何を・どのように身につけていくのかを，自身の力量形成の計画として，スライド数枚でまとめる課題を課している。現状分析からスタートして，最終的にどういう到達点に向かおうとしているのかを，多少なりとも具現化するところから始めている。

## ３．学びのモデルを作るために

新学習指導要領では，《主体的・対話的で深い学び》をどのようにデザインしていくのかが課題となっている。教育方法の課題は「理論と実践の

融合」だと考えているが，その基盤となる理論体系には，学習科学・認知科学の成果を用いている。学生たちには，授業の前半（第３回目～８回目ぐらい）で，重要な理論－動機付け，参加しながら学ぶこと，対話で理解が深化する仕組みなど－を分担して読んでもらっている。幸いなことに，『人はいかに学ぶか』，『教育心理学概論』，『教育心理学特論』などの優れた書籍が日本語で読めるのだ。

学生たちは，理論を読み，読んだ内容を友達に説明し，理論と実践を結びつける活動に取り組む。ここでの経験を通して「主体的・対話的で深い学び」に対する，学生なりの学びのモデルを構築することが期待されている。

## ４．理論と実践とテクノロジの融合

残りの回数は，理論をもとにした実践開発に取り組んでもらう。年度と参加者の状況によって課題は異なるが，直近の授業では，最終課題として授業やワークショップで使える動画（10分程度）と指導案（に該当する計画書）の執筆を課した。本科目は３年次以降の各教科教育法とは異なり，特定教科の指導法は対象としていない。既読の理論も念頭に置いて，広くは教育の場面で使える動画制作を通して，今後来るべき多様な教育場面のニーズに応える練習も兼ねている。

学生たちは，スマホやタブレットを使って，動画を編集してくる。課題を聞いて最初は青ざめている学生もいるが，グループでの作業を通して，教育現場に使えそうなアプリなどを探し出し，中には高度な編集をしてくる学生もいる。驚くべきは，学生たちはさすがスマホ世代なのか，苦手意識を持つ学生たちも，徐々に最初に感じていたテクノロジへの抵抗はすぐに解消していくようである。教職に就くという観点から，可能な限り効率性を考えるように助言している。

課題となるのは，授業（や動画）の目標設定（単元目標の設定）である。想定される対象が，その動画を通して一体何を身につけることができるようになるのかが明確に設定されないために，全体の構成があやふやになることがあるのである。学生たちは，参加者からのコメントによってこのことに気づいていくのである。

## ５．おわりに

教育方法の授業は，学生たちが理論と実践の融合を体感する重要な機会なのである。

今後の課題は，この授業の効果検証である。学生たちが，この授業を通して，どのように学びのモデルを変化させていくのか，その概念変化研究だということになる。半期間での学生の変化を追跡できるとしたら，授業作りにもさらなる工夫が見いだせると考えられる。

**〔参考文献〕**

・稲垣佳世子・波多野誼余夫『人はいかに学ぶか－日常的認知の世界』中公新書，1989年。
・ダーリング・ハモンド，リンダほか（秋田喜代美ほか訳）『よい教師をすべての教室へ－専門職としての教師に必須の知識とその習得』新曜社，2009年。
・三宅芳雄・三宅なほみ『教育心理学概論』放送大学教育振興会，2014年。
・三宅芳雄・白水始『新版　教育心理学特論』放送大学教育振興会，2018年。